

# 日中国交正常化 50 周年を記念する特別デジタル展 「故宮の世界」

神谷 直亮

今年、田中角栄、周恩来の両国首脳が日中共同声明に署名し、国交が正常化してから 50 周年という記念すべき年に当たる。これを契機に特別デジタル展「故宮の世界」が 7 月 26 日から 9 月 19 日まで上野公園の東京国立博物館・平成館で開催された。VR によって再現された清朝最盛期の紫禁城での散策、高精細 3D データを駆使して制作された工芸品の鑑賞、超大画面シアターに投影される山水画などが見られるというので出向いてみた。

会場は、「イントロダクション、天子の宮殿、紫禁城」「バーチャル紫禁城～Night

and Day～」 「デジタル多宝閣～宮廷工芸コレクション～」 「千里江山図巻シアター～天才画家・王希孟が描いた世界～」 「清朝宮廷の書画と工芸品」の 4 部構成であった。

「イントロダクション、天子の宮殿、紫禁城」のコーナーでは、紫禁城の名前の由来である古代中国の天文学との関連性をイメージしたインスタレーション（芸術的空間）が紹介された。投影は、手前の床に直径約 3 メートルの半円形モニターを設置し、正面の 3 画面モニターの映像と連動させる投射方式で行われた。この両者の連動が実に見事で、世界最大の木造宮殿全体を俯瞰し、注目の大和殿に上ることもできた。

「バーチャル紫禁城～Night and Day～」のコーナーでは、明王朝（1368～1644 年）清王朝（1644 年～1912 年）の歴代の皇帝が国を治める拠点とした紫禁城を大型 LED ビジョンで体感できるように設定されていた。タイトルの通りバーチャル空間に没入し内部を歩き回りながら臨場感のある映像を楽しめた。設置された大型 LED ビジョンは、ソニー製の高精細「Crystal LED」で、時空を超えて楽しめるようにアレンジしてあった。具体的には、天安門、午門、太和門といった壮麗な門をくぐったり、政務や儀式を行った三大殿と呼ばれる太和殿、中和殿、保和殿に入り込んだりして、最盛期の紫禁城の雰囲気を楽しめた。

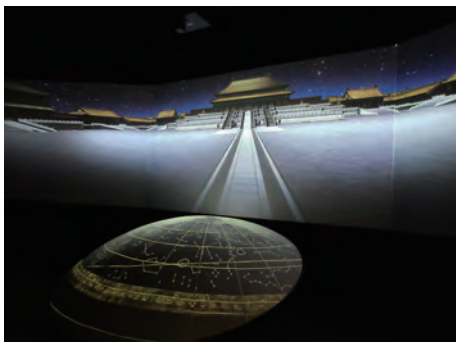


写真 1 「イントロダクション、天子の宮殿、紫禁城」は、半円形モニター（手前）と 3 画面のモニター（正面）を連動させる投射方式で行われた。



写真 2 「バーチャル紫禁城～Night and Day～」は、歴代の皇帝が国を治める拠点とした紫禁城の全貌を LED ビジョンで体感できるように設定されていた。

「デジタル多宝閣～宮廷工芸コレクション～」のコーナーでは、故宮博物院の 186 万をこえるという膨大な収蔵品の中から逸品を選び抜き、実物を精緻に撮影した 3D CG 映像が再生された。再生方式は、75 インチ 4K モニターを 6 面縦置きに並べ、青銅器、陶磁器、漆器など 30 点を画面いっぱい映し出していた。4K 映像ということもあり、質感が実にリアルに再現されていた。



写真 3 「デジタル多宝閣～宮廷工芸コレクション～」のコーナーでは、75 インチ 4K モニター 6 台を駆使して青銅器、陶磁器、漆器など 30 点が紹介された。



写真 4 「千里江山図巻～天才画家・王希孟が描いた世界～」は、14 メートルの横長大画面で公開された。



写真 5 「清朝宮廷の書画と工芸品」のコーナーには、東京国立博物館が所蔵している「粉彩透影唐草文双耳瓶」が注目の的になった。

ちなみに多宝閣とは、皇帝が収集した豪華な工芸品を飾るための調度品棚をさすという。

「千里江山図巻シアター～天才画家・王希孟が描いた世界～」を展示した広々とした部屋の天井には、プロジェクターが5台設置されており正面、左右の3画面に向かって左から右にゆるやかに流れる映像が上映された。画面に映し出されたのは、「二条の滝に通ずる道と旅人」「山里と鳥の群れ」「楼閣のある橋と景色を楽しむ人々」「漁師の営み」「白い酒旗を掲げる店」など、12世紀初頭に活躍した画家、王希孟が残した青緑山水画である。大画面について確認したら、幅が約14メートルで、向かって左から右にゆるやかに折れ曲がった3画面構成にしているとのことであった。

「清朝宮廷の書画と工芸品」のコーナーには、東京国立博物館が所蔵しているコレクションが展示された。特に目を引いたのは、大清乾隆年製の銘が入った「粉彩透彫唐草文双耳瓶」、乾隆帝の時代の市井の賑わいぶりを描いた「慶豊図巻」である。

予想外だったのは、東洋館地下一階にある「TNM & TOPPAN ミュージアムシアター」で、別途「故宮 VR 紫禁城・天使の宮殿」の上映が行われていた。約35分のバーチャルリアリティにより再現されたこの作品の見どころは、壮麗な儀礼に使われた「太和殿」、皇帝の政務と日常生活の場となった「養心殿」、乾隆帝の理想を象徴する「倦勤齋」の3つの宮殿である。他にも三希堂、隠居後の多くの小部屋、舞台、隠し扉、天井に咲く藤の花などが目を引いた。視聴した後に目を凝らしてみたら、ミュージアムのステージに女性のナビゲーターが配置されており、iPadをコントローラーに使用して上述したVR画面の案内役を務めていた。

見終わった後の印象を述べると、撮影の対象を昔にさかのぼって正確かつきれいに

伝えることに専念するあまり、時代を経た現在の様子が目に浮かばないという弱点があるように見受けられた。

今回の「故宮の世界」を機会に凸版印刷の文化財コンテンツ事業について調べてみると、同社は20年以上にわたりVR技術を用いた「トッパンVR」の開発に取り組んでいることが分かった。開発の2本柱は、ステレオカメラを用いた形状計測システムと立体の正射投影画像の取得が可能なオルソスキャナーである。

一般に公開中のVR作品も多く、現時点でのタイトルと視聴できる会場は下記の通りと判明した。

「熊本城 不落の名城を読み解く」(熊本県熊本市の常設シアター、桜の馬場色彩苑で公開中)

「百舌鳥古墳群～時を超えて～」と「百舌鳥・古市古墳群～未来へ伝える人類に遺産～」(大阪府堺市の堺市博物館で公開中)

「絢爛 安土城」(滋賀県近江八幡市の信長の館で公開中)

「洛中洛外図屏風 舟木本」(福井県大飯郡の関西電力PR館エルガイアおおいで公開中)

「伊能忠敬の日本図」(東京都文京区トッパン小石川ビルの印刷博物館で公開中)

これらの他に、「京都 元離宮二条城」(2002年の作品)「江戸城～本丸御殿と天守～」(2007年)「唐招提寺～金堂の技と鑑真和上に捧ぐ御影堂の美～」(2010年)「よみがえる興福寺中金堂」(2009年)「東大寺大仏の世界」(2010年)「日光東照宮 国宝 陽明門」(2014年)「平城京～はじまりの都～」(2010年)などが知られている。

海外の作品としては、「システィーナ礼拝堂」(1998 & 2014)「ウスペンスキー大聖堂」(2007)「マヤ文明 コパン王朝」(2002)「ナスカ」(2006)「アンコール遺跡 バイヨン寺院 尊顔の記憶」(2007)「海のエジプト 海底からよみがえる、古代

都市アレクサンドリア」(2009)「マチュピチュ～太陽の聖地～」(2012)などがある。

後日談になるが、TREE Digital StudioのRealize事業部が「故宮の世界」の制作と展示に関与したことが同社のホームページで分かった。同事業部は、2021年1月にデジタルガーデンのDGI InteractiveチームとTTRのMagic-TPが統合されてきたコンテンツ制作部隊である。同事業部の発表内容によれば、凸版印刷と故宮博物院が推進している「故宮文化資産デジタル化応用研究(故宮プロジェクト)」の成果を活用し、「故宮・紫禁城」の世界観をデジタルで再現したという。プロデューサーには平嶋将成氏が、プランナー・ディレクターには森淳旨氏が選ばれている。

具体的な貢献内容には触れていないが、Realize事業部のプロモーション・コンテンツの実績から判断して、最も力が入っていたのは紫禁城のウォークスルー映像で、夜(星空)と昼(青空)のシンメトリー映像を巧みに取り入れるのに苦労したようだ。また、この作品は地上から空を見上げる手法を施しており、イントロダクションの北極星を中心とした宇宙から地球を見下ろして地球上の紫禁城をハイライトする演出と対照的であった。

次いで、宮廷工芸コレクションの手法が秀逸であった。実寸映像を見せることで来場者の目を引き付けて、実物を見ても気づかないような質感を出しかつ細部まで大写しで見せることでリアル感をいかに醸し出していた。

さらに、「慶豊図巻」では、当時の市井の賑わう映像とこれを盛り上げる音楽のマッチングが絶妙で、Realize事業部の実力が如実に感じられた。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディア・ジャーナリスト